

「多様性が拓く未来を考える」プロジェクト～公開フォーラム開催を通じて多様な個性が生きるチームづくりと対話型リーダーシップを学ぶ～

1 目的・概要

このプロジェクトの目的は「対話」を用いた、公開フォーラムの開催を通じて「私たちが抱える諸問題が『多様性』によって解決へと向かう可能性を探る」というものです。

春学期には様々な「多様性」に目を向け、多くのフィールドワークを行いました。

発達障がい・LGBTQの当事者の方との対話、様々な生きづらさを抱えた人が集まり支えるバザールカフェ、幼児教育の場で「多様性」を取り入れ実践されている体操教室への参加、「多様性」を活かし場づくりまちづくりを行うグローバルセンターへの訪問、障がい者雇用を積極的に行われているオムロン京都太陽株式会社への訪問。



加えて、私たち自身の「多様性」に目を向けました。自身が抱える「生きづらさ」と向き合うことで、解決すべき諸問題が決して特別なものではないということを知りました。また、プロジェクト内での一人一人の個性を知り、互いの「多様性」を認めることの出来るチームづくりを行いました。

様々な「多様性」に触れた結果、それらが「違い」として「生きづらさ」を生み出している現状を感じ学び、自分の「多様性」を自身が認めることをテーマに『対話を通じて自分を知る』フォーラムを開催しました。

秋学期には「多様性」を認め、活かす手段として「対話」を中心にプロジェクトに取り組みました。11月にはArt of Hostingに参加し「SDGs×ユース」をテーマに札幌での3日間のプログラムの中で多くの「対話」の形式を学び実践を行いました。

12月には『セクシャルマイノリティを知る、伝える、受け入れる』『対話の足湯～肩書きに縛られずにお話する』という2つのフォーラムを開催しました。

Annual Schedule

| | | |
|-------|-----|--|
| 2019年 | 4月 | チームビルディング |
| | 5月 | 発達障がい・LGBTQ 当事者を交えた対話 体操教室わんぱくキッズへの参加、バザールカフェ訪問学習、Impact Hub Kyoto グローバルセンターへの訪問学習 |
| | 6月 | オムロン京都太陽株式会社への訪問学習 |
| | 7月 | 「対話を通じて自分を知る」フォーラム開催 春学期成果報告会 |
| | 9月 | 春学期の振り返り |
| | 10月 | フォーラム開催に向けた企画・準備 |
| | 11月 | Art of Hosting SAPPORO への参加 |
| | 12月 | 『セクシャルマイノリティを知る、伝える、受け入れる』 『対話の足湯～肩書きに縛られずにお話する』開催 |
| 2020年 | 1月 | 1年間の振り返り、秋学期成果報告会 |

2 成果達成度

ここでは春秋に開催した3つのフォーラムについて書きたいと思います。

『対話を通じて自分を知る』フォーラム

春学期には多くのフィールドワークを行い、様々な人々の生きづらさや、それらを作り出す社会問題を学びました。その多くが本来認められるはずの「多様性」が「違い」として、世間が作る普通からはみ出す存在として扱われる構造によるものであると感じました。その上で私たち自身の生きづらさにも目を向け、私たちもどこかで普通を定め、そこからはみ出すことに生きづらさを抱えていることに気づき「自分の中の多様性を認めること」を目的にフォーラムを開催しました。



フォーラムでは模造紙上に作った公園から、自分の“居心地が良い場所”と“居心地が悪い場所”を切り口に、自分を見つめ直すことを参加者の方と共に行いました。参加者は学生から50代の方まで、幅広い人と対話をする事で、多角的に普段出会うことのない意見を得て、参加者それぞれに新たな発見があり「対話することの楽しさと大切さ」を感じる場となりました。

何よりもフォーラム開催の場が“居心地の良い場”であることを目指して、装飾、呼びかけ、話しやすい環境づくりに工夫して取り組みました。

『セクシャルマイノリティを知る、伝える、受け入れる』

春学期の成果報告会では自分たちの活動が「見えづらい・伝わりづらい」ものであったことを反省し、秋学期では「より具体的に、目に見えるかたちで行動すること」を意識して行動しました。形式は外部からゲストスピーカーをお呼びし、従来の講義型ではなく参加者と共に学び合うワークショップ形式を取りました。内容はセクシャルマイノリティの当事者であるゲストスピーカーと共に、自分自身のセクシャルリティについて数直線で表し、その実状を対話を通して知るというものでした。イベントは盛り上がり、参加者の方から「時間が足りない」という感想も頂くほどでした。



少人数でのプロジェクト運営は、全体のチームと比べて行動の自由が利きやすい分、個人が負う責任が重く、今までイベントを行う上で他のメンバーに支えられてきたのかを痛感しました。このプチフォーラムを通して、「少人数でできること」と「チームだからこそできること」の違いを実感しました。

『対話の足湯～肩書きに縛られずにお話する』



秋学期には春学期のフォーラムの振り返りを行い、Art of Hosting という対話の場への参加を経て、12月のフォーラム開催に向け準備に取り組みました。これまでの活動から、社会で個々が抱える問題をみんなで持ち寄る場に、方法として対話を用いることで、参加者が問題を話すことの重要性を主体化し、そのような場を開催することが社会における対話の必要性を見出せるのではないかと考えフォーラムを企画しました。当日には私たちの考える対話を

発表し、参加者の方たちと共に対話を実践しました。参加者が議論を持ち寄り、対話を用いた議題に対する新たな答えを考える OST(オープンスペーステクノロジー)という形式を用いて「対話とは何か」を考え直し「対話によって生まれる可能性」を再確認しました。広報に関しては、主に Facebook を使った SNS での呼びかけ、チラシ、立看板の設置をしました。Facebook では様々な年代の人に見ただくことを意識し、「#対話」というハッシュタグをつけ対話に興味のある人の目に止まるようにしました。チラシや立看板は主に同志社大学周辺に設置しました。結果は20人ほど集まっただけ、イベント終了後のアンケートでの満足度は81%で、「和やかな雰囲気」「楽しくてほっこりした《足湯》でした」などの声をいただきました。

3 プロジェクトを通じて

このプロジェクトの達成度を可視化して示せるものは、今の所ありません。しかし、このプロジェクトを1年間取り組んだ私たちが得たものはとても大きく、それぞれがこれから、この1年の学びを経て取り組んでいく全てのことが成果となると信じています。ここでは些細な成果として、私たちが得たものを示したいと思います。

1つは「対話」という手段と「多様性」という可能性です。1年間「対話」の場づくりに取り組んだ私たちは何度も「対話」を繰り返しました。普段の会話でもなく、義務教育下で学ぶことの多かった議論でもなく、AとBという意見からCという新たなものを生み出す「対話」という話し方を身につけたこと。Cという答えはAとBという「違い」が無ければ存在し得えません。「違い」という「多様性」があるからこそ「対話」は成立し「対話」によって生み出されたものは大きな可能性を持つことを、私たちは学びました。

2つ目は「多様性」を生かしたチームづくりです。春学期に私たち自身の対話を重ね、互いの凸凹を知り、性格・得意不得意等を共有出来たからこそ、補い合い高め合えるといったチームづくりを実践することができました。その中で一人一人がそれぞれのリーダーシップを考え、実践していきました。1年間を通じて「互いの違いを受け入れる」というプロジェクトルールを定め、参加した Art of Hosting では各々の学びや考えが大きく異なり、その発見からより「多様性」を生かしたチームづくりとは何かを考え、目指すこととなりました。

3つ目は個人の変化です。プロジェクトの活動を通じて「対話」や「多様性」から履修生それぞれが異なったメッセージを受け取り、異なった変化を感じているように思います。

以上の学びを得た私たちは、この学びをこれから様々な場所で、様々な形で発揮していくこととします。その取り組みがそれぞれの場所をより居心地の良いものとし、きっといつかその取り組みが多くの人にとって生きやすい社会をつくることへとつながることを祈り信じています。



編集後記

近年「多様性」を耳にする機会が増えたように思います。印象に残るのはラグビーW杯、日本代表。多国籍や多国にルーツを持つ選手からなるチームとして注目され「One Team」が流行語大賞ともなりました。「多様なのに One Team」ある意味とても矛盾しています。そこにあるのはきっと「わかりあおうとする」ことです。育った国が違えば当然言葉、価値観が違う。同じ国であったとしても考え方が異なるのは当たり前のことです。同時に「分断」の時代であることも忘れてはなりません。他者との間には「わかりあえない」ことがたくさん存在します。しかし「わかりあえない」からといって対峙するのではなく「わかりあおう」と努力すること、時に歩み寄ること。その手段として「対話」は存在するのだと学びました。「対話」にはいくつかの（厳格でない）ルールがあります。「自分と他者を大切にすること」。すなわち「わかりあおう」とすること。つまりは「多様性という違いを大切にし、違いがあるからこそ生まれるものを大切にすること」なのだとして1年間の学びを振り返り、今改めて思います。

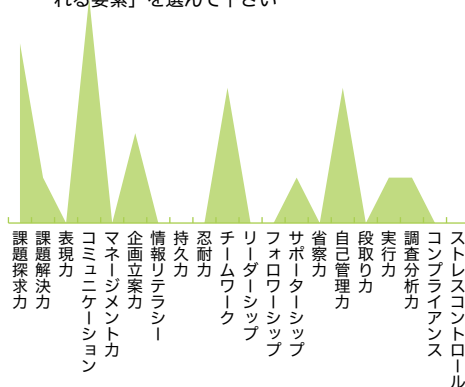
プロジェクトメンバー

中尾 留梨子(文2) 間宮 大貴(法4) 黒宮 大介(経済3) 末永 万優子(経済2) 村上 実穂(政策2)
橋本 麻妃(グローバル地域文化3) 宮村 日菜子(グローバル地域文化3)

プロジェクト活動 アンケート集計結果

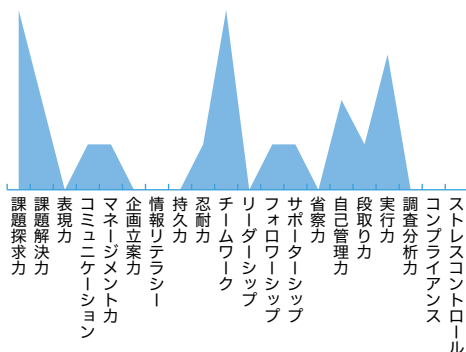
授業開始時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

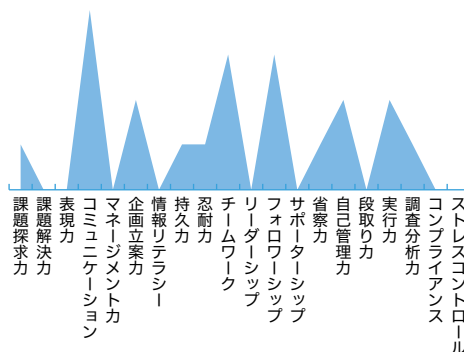


春学期終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

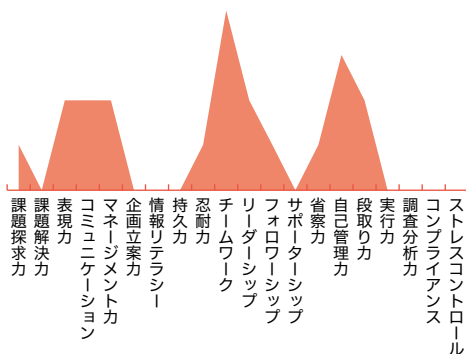


Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい



授業終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい



Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい

